在日中国児童の支援活動における留学生の役割及び自己成長
-東京都荒川区での実践を例に-

中国天津外国語大学講師
早稲田大学大学院教育学研究科博士課程　孫 暁英（ソン シャオイン）
SUN Xiaoying

（本稿は早稲田大学教育学研究科紀要別冊投稿中の論文一部を改正したものである。）

１．はじめに

グローバル化が進み、経済も発展し、国境を越えて人々の往来も著しい。それに伴い、日本における外国人も定住する率が近年多くなり、親の経済的自立に伴い、本国から妻と子どもを呼び寄せる傾向が見られる。外国人の子どもの教育が非常に問題になっている。各地方自治体で適応指導及び学力保障の支援活動が全国各地で行われるようになった。しかし、それぞれの地域特有の問題点に応じて出された支援体制がまだ十分に整備されていないということと、地域で生活している留学生というリソースがまだ十分に活用されていないということが現状である。

本稿は、東京都荒川区で教育委員会、民間団体及び留学生の三位一体の協働による実践を取り上げ、支援活動に参加する留学生の役割を明らかにすることと、支援活動を通して、留学生がいかなる矛盾や葛藤を乗り越え、成長したかについて考察することを目的とする。

筆者は 2010 年４月から正式にボランティアの一員として支援活動に参加することになり、実践を通して、ことばの力は想像以上に学習・生活に果たす役割が大きいことが分かった。こどもは相手に自分の考えを伝達することができない。その辛さを、支援活動を通して肌で感じた。ことばができないということは、自分の考えを他者に伝えられない。そして他者の考えも理解できない。クラスの中で、コミュニケーションができないため、自分と教師、クラスの子ども達との間に、「壁」ができてしまい、自分で自分の「殻」を作ってそこに閉じこもる児童・生徒が多い。それを打ち破るために、各地方自治体では試行錯誤・模索中である。このような多文化共生の教育現場では母語ができる留学生の存在が極めて重要であることが分かる。荒川区では、留学生支援活動は 2007 年から始まり、現在に至る。留学生にとっても、支援活動は、貴重な体験となり、豊かな留学生活を送ること及び今後の人生にも大きな影響を与えるだろう。支援活動は単に一方的に与えることだけではなく、与えると同時に得られるものも大きい、すなわち相互作用である。

研究方法としては、支援に参加した留学生の支援活動の報告書及び留学生への聞き

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

取り調査、最初に支援を発足させた荒川区日中友好協会の関係者、支援を推し進めた小学校の校長先生へのインタビューなどの資料をもとに考察を進めていく。

本稿の構成については、まず、荒川区の事例を紹介する。教育委員会、教育現場及び留学生との連携による実践。次は、留学生の支援報告書とインタビューデータを照らしながら、留学生支援の役割について述べる。最後に、留学生の内面的変化に注目し、留学生の自己成長について考察する。

２．事例概要

荒川区は東京23区の東北部に位置しており、荒川区の総面積は10.20kmで、広さは23区中21番目である。2009年１月には20万人を超え、2012年９月１日現在人口合計205,679人、そのうち、外国人人口合計15,098人である[1]。2012年５月１日現在、小学校数は24校で、児童数は8,031人[2]である。日本の国際化が進む中、荒川区においても外国籍の子どもたちが数多く小・中学校に在籍している。特に中国国籍の子どもが多いため、平成21年度から中国からの留学生を派遣する事業を新たに開始した。

本事業の目的としては、平成21年度荒川区教育委員会主要施策に関する点検・評価報告書[3]に以下のように記録されている。

「日本の国際化が進む中、本区においても外国籍の子供たちが数多く小・中学校に在籍している。こうした日本語を母語としない子供たちが授業で分かる喜びと伸びる喜びを味わい､他の子供たちとよりよい人間関係を築いていけるようにするためには、日本語を早期に習得し、学習内容理解に結びつけていくよう支援体制をさらに充実していくことが課題である。そのため、平成21年度から中国からの留学生を派遣する事業を新たに開始した。」

「分かる喜び」と「伸びる喜び」というキーワードがあるように、実際もそういう志向性で活動を展開している。

表１　留学生支援統計[4]

年度	留学生数	支援の学校名
2009年度	10人	六日、四峡、赤土、六瑞、五峡、八幡中学校
2010年度	12人	六日、汐入東、汐入、瑞光、三日、五峡、八幡中学校
2011年度	6人	五峡、原中学校、六日
2012年度	13人	尾久西、赤土、ひぐらし、五峡
計	41人	13校（2回以上重複の場合は1回で計算する）

注：荒川区教育委員会から発行された[実績証明書]（2009年～2011年）及び2012年の記録より筆者作成

支援の内容・方法

① 当該校校長、副校長、担任、指導室担当と支援者（留学生）と打ち合わせ。

② 実際に曜日検討、何を、どのように支援するか、主に担任と細かに検討。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

③ 現在の児童の様子などを聞く。児童と対面。
④ 体制づくり：１人の子どもにつき留学生２人であたる（１週間どちらかが都合がつかない時でも必ず指導できる体制をとる）。
⑤ 日本の給食になれない児童には支援者が一緒に給食を食べるなど特別配慮をする。
⑥ 支援の第一回目、学校側は朝会等で留学生を紹介する。この制度を現場の教師や児童、生徒に理解してもらう。
⑦ 留学生は、校長または副校長に来校したことを告げてクラスにはいる。支援後、記録を付けて学校側に提出する。記録の仕方は各校で異なる場合がある。
⑧ 支援終了した時荒川区教育委員会から[実績証明書]が発行される。

３．支援の活動における留学生の役割

本稿は、支援活動に参加する留学生ボランテイアの意識を探るために、活動に参加した留学生の報告書から絞った（詳細は表２を参照されたい）。

参加者の支援体験は様々である。帰国、進学、就職などの事情より、支援期間は半年から１年となっている。支援した子どもは基本的に１人であるが、２人、３人支援というケースもある。支援活動の形は取り出し指導、教室で付き添いの教科指導そして学校と両親との通訳などに大きく分類できる。

表２　留学生支援の一覧表

番号	留学生	性別	当時所属	支援対象者	支援期間	支援活動
1	XS	女	博士１年	小学校６年生	2009年６月～2010年３月	授業時の通訳、教科指導
2	GX	女	修士１年	小学校２年生	2009年７月～2010年12月	授業時の通訳、教科指導
3	YC	女	大学３年	小学校２年生	2009年９月～2010年１月	授業時の通訳、教科指導
4	LM	男	大学４年	小学校４年生	2009年９月～2010年２月	授業時の通訳、算数と国語指導
5	LL	女	大学３年	小学校２年生	2009年９月～2010年２月	授業時の通訳、教科指導
6	YZ	女	修士１年	小学校１年､2年、4年の３人	2009年６月～2010年３月	両親に通訳、教科指導
7	WH	女	修士１年	小学校１年、４年の２人	2009年６月～2010年３月	両親との通訳、教科指導
8	JH	女	大学４年	小学校１年生	2010年10月～2011年２月	授業時の通訳、教科指導
9	WL	女	大学３年	小学校３年、２年の２人	2011年９月～2012年４月	教科指導、学芸会の練習

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

（１）心のケア

支援活動は心のケアに果たした役割が大きい。異文化適応の促進要因について、劉・服部（2012）によれば、人は新環境へ移行した後、環境と快適な関係を保つために、適応問題に直面する。特に異文化環境である場合、自分の馴染んだ文化、習慣と異なる環境は適応に対する心理的負担がさらに大きいものである。

留学生 LL は「私の『生徒』はＥ学校のＮ君です。初めて会った時、いろいろ話し合ってくれて、すごく活発でかわいいと思いました。しかし、私が帰る時、教室に入ったＮくんを見て、彼が寂しいという感じが浮かびました。席は教室の隅で、周りのクラスメートと話さないまま座っていました。その時、助けてあげたいという気持ちでやる気が出ました」と語る。このように、大人より子どもは寂しさと精神的な不安が大きいと言える。異文化の中で無力感や喪失感に満ちて、精神的に過敏になり、暴れやすい状態である。早期解決してあげないと、精神的なストレスが累積し、潜在的・慢性的パニックな状態に陥る。来日間もない時期に母語で語ってくれる人の存在は子どもにとって大きいと言える。留学生の支援を通して、子どもも安心し、学校生活及び学習に慣れていく。

（２）適応指導と教科学習指導

XS「支援は、週に一回、授業に同行し、分からないところを母語の中国語に通訳してあげる形式を取りました。国語、社会、数学の授業が主でしたが、英語の授業に３回ほど、音楽、家庭科、総合学習の授業にも一回ずつ参加しました。自分は中国の生まれ育ちで大学時代から日本語を勉強し始めたのですが、これらの日本での授業内容は、実は私にとっても新鮮な内容でした。」このように、留学生が行っている支援活動の様子が読み取れる。

WL「Ａさんと Ｂ君への支援を通して支援することにもっと新しい理解ができました。支援というのは単純に日本語を教えることではなく、子供の生活環境と考え方をちゃんと理解して必要に応じて手伝うことと日本の生活をもっと早く慣れてもらうために、日本の習慣と風俗を教えることも大事だと思います。」

このように、支援者は日本の生活習慣文化などを十分理解した上で、言葉を教え、各教科の学習の支援も行う。言葉を習得する中で、生活及び学力も保障されていく。支援者も子どもに接するに当たり試行錯誤している。

（３）パイプ役

日本語がまだ話せない時、留学生は子どもと教師、教師と子どもの両親、そして子どものクラスの友達とのコミュニケーションをうまく取るために、通訳することが大事である。

LL「Ｎくんは試験を受けた時、弱いところがわかりました。試験の問題を理解できないこと、通訳してあげて、解答が分かったのに、書けないことが彼を困らせました。こういうことも私たちはわかりました。やっぱり支援を続けるべきだと感じました。」このように、教科書の文字だけではなく、内容も合わせて理解させるために通訳が必要であることが分かる。

また、YZ「支援の内容は主に学校の先生とご両親の間の通訳をやることでした。Ｈ

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

くんのお父さんが『この子１人のためにいろいろの専門分野の先生と通訳の人たち、こんなに大勢かかわってくれて本当にびっくりしました。ありがとうございました。』と言ったことが印象ぶかかったです。また、お母さんは私が通訳として学校に行くとホッとした顔をしてくれました。」

支援をすることによって、子どもだけではなく、子どもの両親も安心したことが分かった。支援者を通して、違う言語を持っている子ども、現場の教師、子どもの親が一体となり、互いに共通理解することができる。

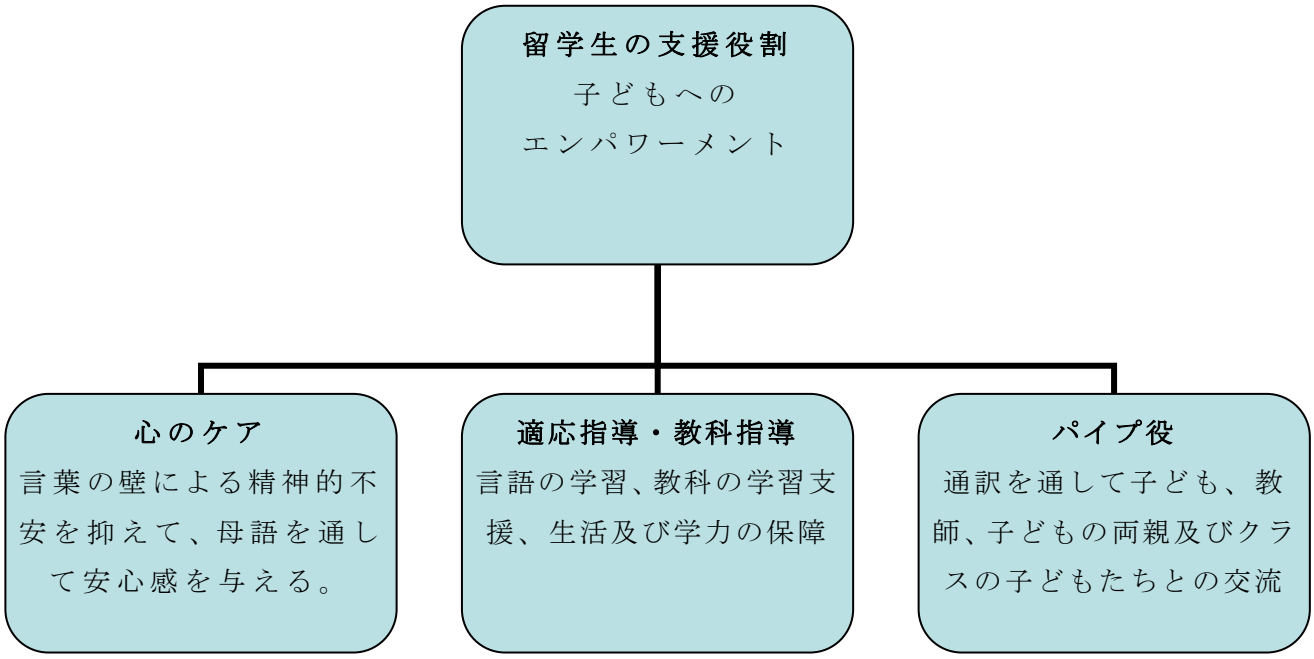

図１　支援活動における留学生の役割

４．支援活動を通して留学生の自己成長

新庄（2008）によると、地域日本語活動に参加することによって、新たな自分との出会いを通じて感じる「やりがい」や「人の役に立った」ことによる満足感によって、他者に必要とされている自分を実感するという「ボランティア」としての自己認識が、地域日本語活動にボランティアを繋ぎとめているのである。

（１）日本人と日本社会に対する理解を深めること

普通の留学生は日本の公立小学校に入るチャンスがあまりない。支援活動によって、初めて日本の小学校、中学校に入ることができ、実際に現場の教師たちと話し合う機会が得られる。教室の雰囲気、展示物、目標、給食のやり方、掃除のやり方、教育の仕方、子ども達の様子なども見ることができ、すべて日本に対する「再発見」である。

WH「日本の学校は知識の面だけではなく、考える力、集団性の訓練、個性の引き伸ばし等あらゆる方面から子どもを育てている事、それに対して、中国の学校は学歴社会で生き延びるために知識能力を重点に子どもを育てています。」

このように、直接日本の教育現場を見ることにより、留学生自身の小学校時代の教

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

育の在り方や現在の中国の教育方針などの比較検討材料になっている。自国を客観的に見る力も備わってきた。

（２）他人に役立つ、自信を得る

学生生活では社会に役に立つ､他人に何かをしてあげるという経験は極めて少ない。特に留学生生活は援助される立場の方が多く、自信を持って生活する場面が少ない。しかし､このような支援を通して､いろいろな場で役に立っていることを実感できる。

XS「何より楽しかったことは、Ｙさんを助けてあげることができ、自分のやりがいを感じたことです。私の通訳や教えを通じて、Ｙさんがもともとわかっていなかったことをわかるようになった時、本人はもちろん喜んでいましたが、私もとてもうれしかったです。役に立ててよかったと思いました。」

（３）自己を見詰め直す機会

こどもの異国での不安、プレッシャーなど様子を見て、自分自身を見ているように感じた。こどもとの対話を通して、自分自身の留学生活を考え、自己を見詰め直す機会でもある。

GX「日本語指導教員として今まで４ヶ月ぐらい働きました。日本語を教えるだけではなくて、中日両国の子ども及び先生のことまで色々勉強になりました。そこで日本独特のことに気がつきました。自分と異なる文化をもつ人々と出会った時、自分と同じ文化を共有する人々だけの集団では気付かなかったものが見えてきました。日本での体験は自分と異なる文化や人々を通して、これまで見えていなかった自分を気付かせてくれる素晴らしい機会であると言えます。」

この過程において、個人は今までのなかった自分に、柔軟な適応力と広い視野があることに気付く。まさに、“異文化との出会いとは、自己発見の過程”である（劉・服部,2012)。

（４）挫折と葛藤

XS「いつも楽しかったことばかりではなく、つらかったこともありました。Ｙさんが勉強にやる気がない時、わからなくて自暴自棄になったりする時、私はとてもつらくて腹が立ちます。何で私はここにいるのかと疑問さえも湧いてきます。」

上述してきたことは図２のように、支援活動では教えることの楽しさや自己成長の喜びを感じることと同時に、支援の困難さを乗り越えながら、挫折と葛藤も味わっている。しかし、その困難や挫折を味わいながらも、それでも一人で工夫して克服していく。それが彼らの大きな成長につながるだろう。

今までの留学生の支援活動の中から、そばにいてあげるだけで安心した子どもの笑顔、通訳を通して教科内容が理解できた喜び、支援活動が終わり最後にくれた感謝の言葉、すべてが自分のこころに刻みこまれ、浄化される。自分も子どもと共に成長していることが明らかになった。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

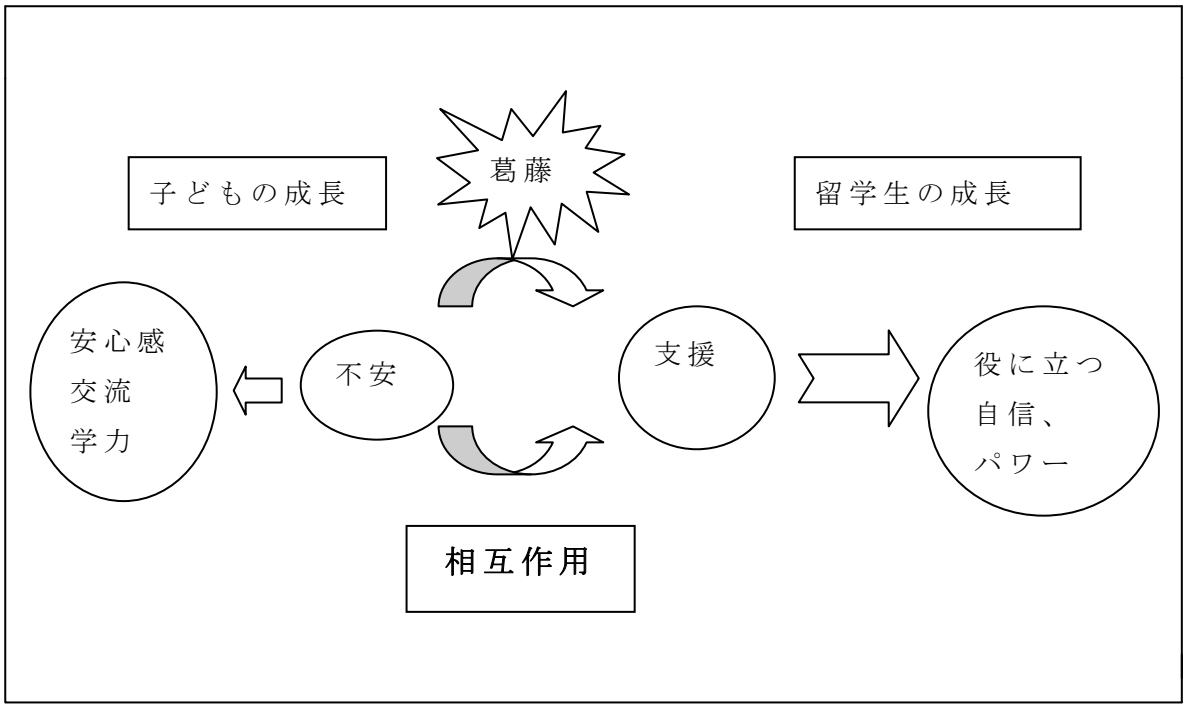

図２　相互作用による留学生と子どもの成長

５．おわりに

本稿は、東京都荒川区での実践を通して、また報告書などの資料を考察した結果、支援活動に参加する留学生の役割及び留学生自身の成長が明らかになった。

まず、留学生の役割としては、子ども達の心のケア、適応指導・学習指導、通訳活動を通してのパイプ役などが挙げられる。次に、それと同時に学生自身の自己を見詰めるチャンス、教える工夫、葛藤や挫折を味わいながらも支援をやりこなせた成功体験、子どもの早い成長に自分自身のやりがいを感じたことが分析の結果分かった。学生自身も異国での居場所が見つかり、自己発見する場でもある。

今回は支援に携わる留学生の役割と成長を中心に取り上げた。今後、支援の子どもが周りの社会とどのようにコミュニケーションを取りながら、成長しているかについて追究したい。

参考文献

池上摩希子・末永サンドラ輝美、「群馬県太田市における外国人児童生徒に対する日本語教育の現状と課題―『バイリンガル教員』の役割と母語による支援を考える―」（特集 多文化社会における日本語教育実践のあり方を問う）早稲田大学大学院日本語教育研究科,早稲田大学日本語教育研究センター(4), 15－27, 2009

内海由美子・横沢由実「日本語指導が必要な外国人児童生徒散在地域における支援のあり方について―『日本語学習支援ネットワーク会議 07 in YAMAGATA』の開催から見えてきたこと―」『山形大学留学生教育と研究』第１号、pp.9-21、2008

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

川上郁雄・中川智子・河上加苗「教育委員会と大学の協働的実践ネットワークの構築--年少者『日本語教育コーディネーター』の役割を視点に」（特集 多文化社会における日本語教育実践のあり方を問う）早稲田大学大学院日本語教育研究科,早稲田大学日本語教育研究センター(4), 1-14, 2009

朱桂栄「『母語による先行学習』が促進する『日本語による先行学習』―母語の読み書き能力を持っている子どもの『国語』学習の場合－」『言語文化と日本語教育』30号、pp.21－30、2005

朱桂栄「教科学習における母語の役割―来日まもない中国人児童の『国語』学習の場合－」『日本語教育』119号、pp.75－85、2003

新庄あいみ・西口光一「地域日本語活動に参加する市民ボランティアの意識―大阪府下で活動するグループを例として－」『大阪大学留学生センター研究論集　多文化社会と留学生交流』第11号、pp.57－64、2007

新庄あいみ「地域日本語活動の現場から－ボランティアの意識における､『やりがい』の循環と『教えること』の固定化―」『大阪大学留学生センター研究論集　多文化社会と留学生交流』第 12号、pp.87－97、2008

原田登美「ソーシャル･サポートにおけるホームステイの有益なサポートと有益でないサポート：留学生から見たホームステイ評価」『言語と文化』16, 甲南大学国際言語文化センター155-188, 2012

劉音・服部環「在日中華系留学生における異文化適応の促進要因について 」筑波大学心理学研究-(43), pp.9-14, 2012

若生正和「渡日・帰国した児童生徒と交流する留学生に見た潜在力と可能性」『留学生教育』 14, 大阪教育大学留学生指導センター、pp.26-32, 2008

注釈

[1] 荒川区公式ホームページ

[2] 平成24年度小学校児童数・学級数　2012年９月17日最終閲覧
http://www.city.arakawa.tokyo.jp/kurashi/kyoiku/kuritsu/shogakko/gakkyusu/240501jidou.files/24.5.1jidou.pdf

[3] 平成21年度荒川区教育委員会主要施策に関する点検・評価報告書2012年９月14日最終閲覧
http://www.city.arakawa.tokyo.jp/kurashi/kyoiku/kyoiku/hyokakekka.files/H21houkokusyo.pdf

[4] 日中友好協会の関係者の記録によると、制度化されない 2007 年、2008 年度も何人かの留学生はボランティアとして尾久西小、六日、赤土、尾久小に関わっている。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.